

学位論文要旨

男性同性愛者のアイデンティティ発達に関する研究  
——カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪に着目して——

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 心理学分野  
D176134 高藤 真作

## 目 次

### 第 1 章 本研究の背景と目的

- 第 1 節 同性愛者の置かれた社会的背景
- 第 2 節 同性愛の歴史と同性愛者のアイデンティティへの関心
- 第 3 節 カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪への着目
- 第 4 節 本研究の目的

### 第 2 章 男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示(カミングアウト)に至るプロセス(研究 1)

### 第 3 章 男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容の検討(研究 2)

### 第 4 章 男性同性愛者のコミュニティの特徴と関係構築のプロセスの検討(研究 3)

### 第 5 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 本研究の限界と今後の課題

### 引用文献

## 第 1 章 本研究の背景と目的

### 第 1 節 同性愛者の置かれた社会的背景

電通ダイバーシティ・ラボ (2019) の 2018 年に行ったインターネット調査では,性的マイノリティに該当する人は全体の 8.9% であり, 社会の中に一定数存在していることが示されている。

日高 (2000) は, 男性同性愛者・両性愛者で異性愛者を装うことにストレスを感じている者ほど, 抑うつ傾向, 特性不安, 孤独感が有意に高く, 自尊心は有意に低いことを明らかにしている。それに対し, 同性愛者・両性愛者としての肯定的なアイデンティティ形成が様々な精神的健康問題の予防に繋がると指摘されている (葛西, 2014)。しかし, 性的マイノリティは可視性の低いグループであり, ソーシャルサポートやロールモデルが得られにくい (石丸, 2002)。そのため, 肯定的なアイデンティティ形成には困難が予想され, 臨床的支援を要すると考えられる。

### 第 2 節 同性愛の歴史と同性愛者のアイデンティティへの関心

かつて同性愛は精神障害の診断と統計マニュアル (DSM-II) では性的逸脱と分類されていたが, 1987 年の DSM-III-R 以降では同性愛に関する診断分類は完全に削除されている。Cass (1979, 1983-84) はこれまで同性愛が自己概念やアイデンティティ研究の文脈から分離されてきたことを指摘し, 同性愛者のアイデンティティ発達の 6 段階モデルを作成している。このモデルでは自らの性的指向を認識することで自己概念が混乱し, 同性愛者であることを徐々に認めつつも, 他の同性愛者との接触を試みる中で同性愛を受容していくプロセスをたどる。Troiden (1979, 1989) もまた同様のプロセスをたどる 4 段階のモデルを作成している。

### 第3節 カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪への着目

カミングアウトは自らの同性愛の受容や、葛藤の克服を示すため、同性愛者のアイデンティティ発達指標となること、アイデンティティ発達に伴ってカミングアウトは増加していくことが指摘されている (Cass, 1979; Rosario, Hunter, Maguen, Gwadz, & Smith, 2001)。しかし、社会的不利益が予測できる場合には性的指向を隠すことも重要であり、発達指標として用いるのは適切ではないという指摘も存在する (Frost & Meyer, 2009)。

アイデンティティとは斉一性・連続性を持った自己が社会において認められている感覚 (Erikson, 1959) であるが、同性愛者のアイデンティティ発達プロセスでは内在化された同性愛嫌悪 (internalized homophobia) が一般的に経験される。内在化された同性愛嫌悪の克服は、健康な自己概念の発達に必須とされている (Cass, 1979; Mayfield, 2001; Troiden, 1989)。内在化された同性愛嫌悪は「他の同性愛者や自らの同性愛に対してのネガティブな態度や影響 (Shidlo, 1994)」と定義されている。しかし、Frost & Meyer (2009) は様々な内在化された同性愛嫌悪尺度が、カミングアウト、同性愛者コミュニティとの繋がり (Mayfield, 2001; Shidlo, 1994) が重要視されている点では共通しているが、それ以外の点では、内在化された同性愛嫌悪の状態像について研究者の間で一定の見解を得ていないことを述べている。

また、アイデンティティ発達には他者の存在や他者との関係性の発達も重要な役割を果たしている (岡本, 1997)。内在化された同性愛嫌悪の克服には他の当事者との肯定的な接触が重要であるが、内在化された同性愛嫌悪は自分や他の同性愛者への否定的

な態度として現れる (Herek, 2004)。さらに宮腰 (2013) はコミュニティ独特の文化への馴染めなさを抱える当事者の存在も報告している。そのため、同性愛者・両性愛者が他の当事者と関係構築していくプロセスには困難が推察される。

#### 第 4 節 本研究の目的

本研究では同性愛嫌悪をより多く体験しやすい男性同性愛者・両性愛者を対象とし、男性同性愛者・両性愛者のアイデンティティ発達とその危機をより詳細に捉えることを目的とする。

研究 1 ではカミングアウトには環境的要因が影響することを仮定した上で、カミングアウトに至る心理的背景とプロセスを明らかにする。研究 2 では男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容のプロセスについて検討する。そして、研究 3 ではアイデンティティ発達に重要とされる他の当事者との関係性の構築のプロセスと同性愛者コミュニティの特徴を検討する。

## 第 2 章 男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示 (カミングアウト)に至るプロセス (研究 1)

**目的** 男性同性愛者・両性愛者が他者への性的指向の開示に至る心理的背景とそのプロセスの検討を目的とする。

**方法 調査協力者と手続き** 縁故法を用いて 22-24 歳の男性同性愛者・両性愛者 10 名 (同性愛者 6 名, 両性愛者 4 名) に調査を依頼し, 60 分から 120 分の半構造化面接を貸会議室等のプライバシーの守られた場所で行った。 **面接内容** (1) プロフィール項目: セクシュアリティ, 年齢, 職業, 家族構成, 居住形態, (2) 性的指向の自覚, (3) 他の同性愛者との交流, (4) カミングアウトの

経験, (5) 被開示者との関係性, (6) 将来的なカミングアウトについて尋ね適宜質問を加えた。 **分析方法** 木下 (2003) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた。

**結果** M-GTA による分析の結果, 当事者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセスにおいて 15 のカテゴリと 32 の概念が生成された (以下, 【】はカテゴリ, 〈〉は概念を示す)。ストーリーラインを以下に記述し, プロセス図を Figure 1 に示した。

当事者の多くは【性的目覚め】に伴い【偽りの自分】を演じ, 特に同性愛の当事者は〈異性愛者的役割葛藤〉を抱えていた。そのため, 当事者は〈自分のことを知って欲しい〉などの理由からカミングアウトを行っていた。【カミングアウトの対象の選択基準】には偏見の有無, 親密さ, 性別, 恋愛感情の相手, 交友関係への影響力が存在した。被開示者から受容された場合には, 〈すっきりした気持ち〉, 〈関係の維持・親密化〉がみられ, 【カミングアウトの促進】が生じた。一方で, 【理解者の獲得】に満足

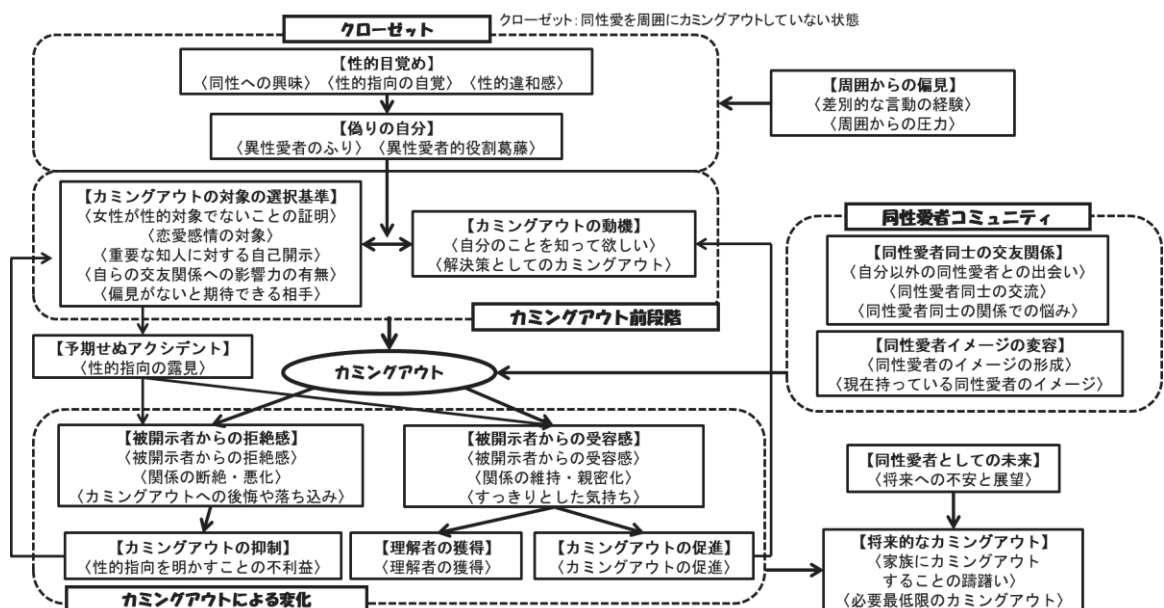


Figure1. 男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセス

し、それ以降のカミングアウトに消極的な場合も存在した。反対に被開示者からの拒絶は〈関係の断絶・悪化〉，〈カミングアウトへの後悔や落ち込み〉を引き起こし、カミングアウトによる不利益を改めて意識することで、当事者はカミングアウトにより慎重になっていた。こうした経験から必要以上に性的指向を隠すことはないが、相手やタイミングを慎重に選択して行う〈必要最低限のカミングアウト〉がよいと考えていた。

**考察** 当事者は素の自分でいられない孤独感の解消のために他の当事者や、異性愛者との嘘のない関係の構築を求めている。しかし、同性愛を受容した当事者においてもカミングアウトの対象の選択には慎重であり、内的動機づけだけではなく、非開示者の特性や関係性、状況に左右されやすいと考えられる。また、カミングアウトを受容された経験によって、当事者はカミングアウトへの抵抗感が低下する。そして一定の理解者の獲得や、他の同性愛者との関係構築によって居場所を得たとき、内的な動機づけは低下し、カミングアウトは必要最低限に留め、積極的に行う必要性を感じなくなると推察される。被開示者の反応が拒絶的であっても、当事者が同性愛者であることを受容的・肯定的に捉えている場合、拒絶の原因を受容しない相手に原因帰属するなど、自己評価への影響は少なく、カミングアウトはカタルシスや被開示者との関係を円滑にするための手段であると考えられる。また、プロセスは共通しているものの、両性愛者では〈性的違和感〉，〈異性愛者的役割葛藤〉，〈女性が性的対象でないことの証明〉に関する語りは見られず、両性愛者は異性愛の要素も有しているために同性愛者と比較して葛藤が少ない可能性が推察された。

### 第3章 男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容の検討(研究2)

**目的** ①男性同性愛者の同性愛嫌悪的態度の体験とそれによる価値観の内在化のプロセス, ②内在化された同性愛嫌悪の変容プロセスを質的に検討する。また, 研究1では同性愛者と両性愛者において一部葛藤に差異が見られたことから, 研究2より男性同性愛者のみを対象とした。

**方法 調査協力者と手続き** 20-40歳の男性同性愛者18名に,

90~120分の半構造化面接を行った。 **面接内容** (1)プロフィール項目:セクシュアリティ・年齢・職業・出身・居住地・家族構成, (2)性的指向の自覚, (3)差別・偏見の経験とその受け止め方, (4)同性愛, 同性愛者のイメージとその変容, (5)他の同性愛者との交流, (6)同性愛者であることでの葛藤, (7)同性愛者としての将来展望。以上の項目について尋ね, 適宜質問を加えた。 **分析方法** 分析は木下(2003)によって開発された, M-GTAを用い, 分析テーマに①同性愛嫌悪の内在化のプロセス, ②内在化された同性愛嫌悪の変容プロセスの2つを設定した。

**結果 分析1:同性愛嫌悪の内在化のプロセス** M-GTAによる分析の結果, 4のカテゴリーと16のサブカテゴリーと48の概念が生成された(以下, カテゴリーを[], サブカテゴリーを【】, 概念を〈〉で示す)。ストーリーラインを以下に記述し, プロセス図をFigure 2に示した。

当事者は自覚以前から[周囲の価値観]に曝され, 価値観を学習していた。同性愛の自覚に伴い, 【内在化された同性愛嫌悪】が強い当事者は自らの【同性愛の否認】を行っていた。しかし, 【否定しきれない思い】から〈性的指向の確認〉をし始め, 周囲



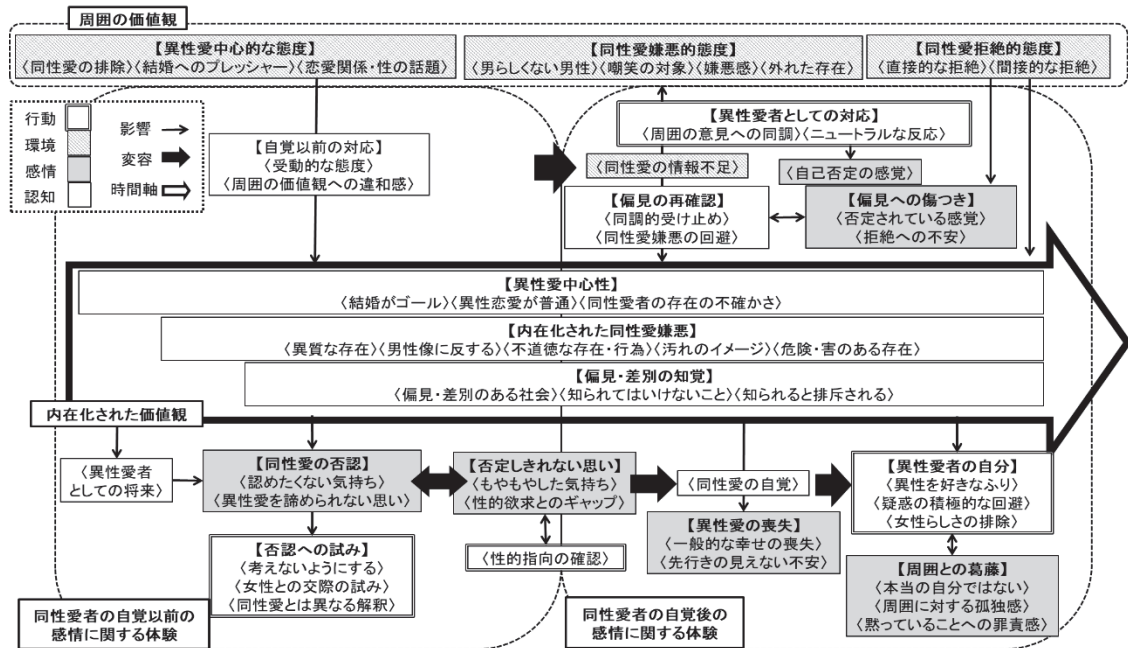


Figure 2. 男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化のプロセス

の【同性愛嫌悪的態度】も意識的に感じ始めていた。しかし、〈同性愛の情報不足〉な当事者にとっては自覚後の【同性愛嫌悪的態度】は【偏見の再確認】となり、【偏見への傷つき】を抱えていた。当事者は自らの同性愛を認め始めるに伴い、異性愛者としての〈一般的な幸せの喪失〉を経験し、同性愛者のロールモデルの不在から〈先行きの見えない不安〉も抱えていた。

分析 2: 内在化された同性愛嫌悪の変容プロセス M-GTA の分析の結果，8 のカテゴリーと 20 のサブカテゴリーと 56 の概念がそれぞれ生成された。ストーリーラインを以下に記述し，プロセス図を Figure 3 に示した。

当事者は【同性愛への関心】と [内在化された価値観] との間で葛藤しつつも，〈性的指向の保留〉をしながら〈知識の収集〉，他の当事者との交流を行っていた。周囲の価値観の偏りに気づくことで【同性愛への価値観の修正】，〈知的な対処〉を行い，他の当事者との関係構築によって同性愛への価値観が肯定的に変容していた。そしてロールモデルや居場所の獲得，〈同性愛者コ

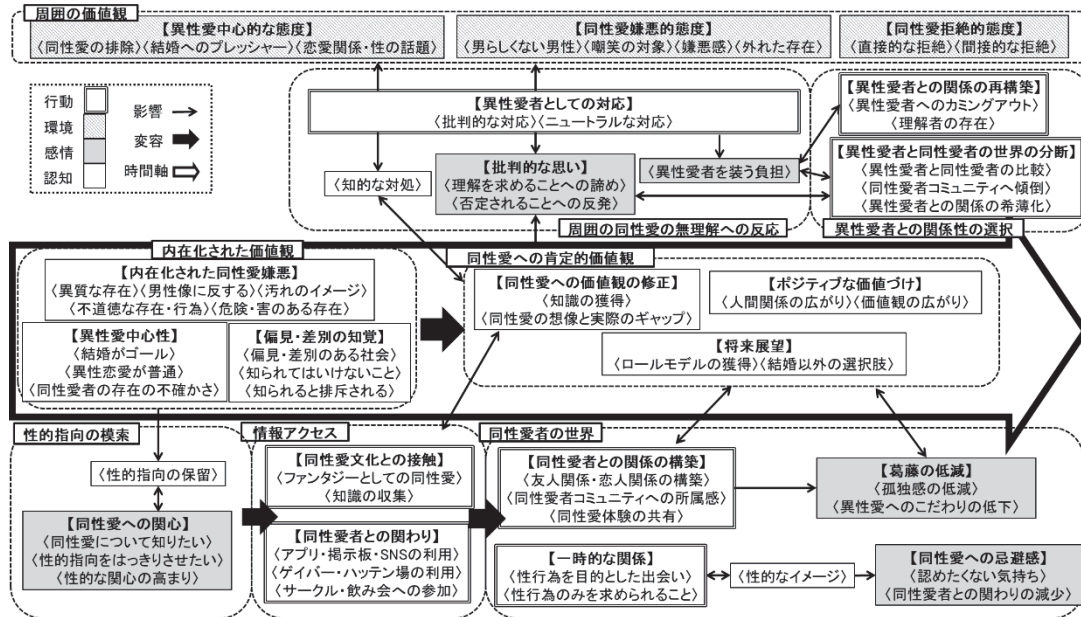


Figure 3. 男性同性愛者の内在化された同性愛嫌悪の変容プロセス

コミュニティへの所属感)によって【葛藤の低減】が促されていた。ただし、同性愛者の〈性的なイメージ〉に馴染めなさを感じると【同性愛への忌避感】を高めていた。また、〈異性愛者を装う負担〉から【異性愛者との関係の再構築】を図る当事者と【異性愛者と同性愛者の世界の分断】が起こる当事者が存在した。

**考察 内在化された同性愛嫌悪への対処** 自らを同性愛者と〈認めたくない気持ち〉を抱える当事者は、同性愛の情報を回避しやすい。そのために同性愛への否定的な価値観に曝され続ける悪循環となっていたと推察され、同性愛の正確な情報や他の当事者との出会いに繋がる困難さが示唆された。また、当事者によっては、自らの同性愛的欲求を否定する、欲求とは異なる行動をとる、同性愛とは異なる解釈をするなどの方略を用いて、内在化された同性愛嫌悪との葛藤の回避を試みていたと考えられる。しかし、“異性愛者である”という認知と自らの欲求・行動との間の不協和が増すことで回避が困難となっていたと推察される。

**内在化された同性愛嫌悪の低減** 同性愛者・異性愛者の間にそれほど差異が

ないことへの気づきから当事者の内在化された同性愛嫌悪は低減されていた。内在化した価値観の中でも不道德、汚れといったイメージの低減は他の当事者との関係構築を理由として語る当事者が多かった。これらのイメージは〈嫌悪感〉，【同性愛拒絶的態度】といった周囲の感情的な反応の経験から形成されているために，同性愛の情報を得るだけでは批判的に〈知的な対処〉を行うことが難しかったと考えられる。

また，同性愛者との関係に傾倒する当事者も存在したが，異性愛者と距離を置くことは，周囲との葛藤を回避でき，1つの適応の在り方と推察される。しかし，今後も周囲の異性愛者との関係性で起こる葛藤はその都度現れ，継続していくと予測される。

#### 第4章 男性同性愛者のコミュニティの特徴と関係構築のプロセスの 検討（研究3）

**目的** 他の当事者との関係構築のプロセスと同性愛者コミュニティの特徴を明らかにすることを目的とする。また，本研究ではコミュニティとは同性愛者間の繋がり全般を指すものとする。

**方法 調査協力者と手続き** 23-34歳の男性同性愛者14名に90~120分の半構造化面接を行った。**面接内容** (1) プロフィール項目：セクシュアリティ・年齢・職業・出身・居住地，(2) 同性愛者としての活動，(3) 同性愛者との対人関係，(4) 関係性の困難，(5) 同性愛者コミュニティ等について尋ね，適宜質問を加えた。**分析方法** コミュニティの特徴，関連要因の分析も行うため佐藤（2008）の質的データ分析法を参考に分析を行った。

**結果** 分析の結果9個の大カテゴリー，31個の小カテゴリーが

生成され(以下,大カテゴリーは【】,小カテゴリーは<>で示す),同性愛者のコミュニティの特徴・イメージに関連するカテゴリーとの関連を Figure 4,他の当事者との関係構築のプロセスを Figure 5 にそれぞれ示した。

**同性愛者コミュニティの特徴・イメージ** 周囲に知られることやネットを介して出会うことへの危機感といった心理的要因によって,同性愛者コミュニティでは匿名性が高まりやすくなっていた。また当事者の目的とする関係性によっては<性的魅力の重視>が起こりやすく,<性的欲求の発散>を目的とする当事者と<親密な関係性の希求>をする当事者など,他の当事者との関係性への態度が異なる当事者が混在するために<希求する関係性の相違>が生じやすい。場合によっては当事者にとっての<望まぬ性体験>となることで,より交流に消極的になる場合もあった。

**関係構築のプロセス** 当事者は親密な関係や性的欲求の発散を目的に他の当事者との出会いを求め,当事者は同性愛者の【コミュニティの心地よさ】を感じることや,<同一化・ロールモデルの対象との出会い>によって,肯定的な同性愛者像を取り込んでいくことで【交流への積極的参加】を行っていた。<お互いの人間性

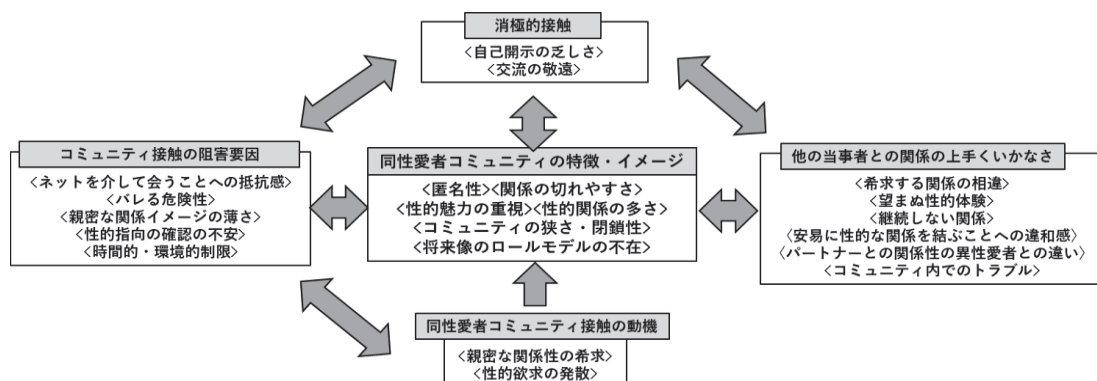


Figure 4. 同性愛者コミュニティの特徴・イメージと他カテゴリーとの関連

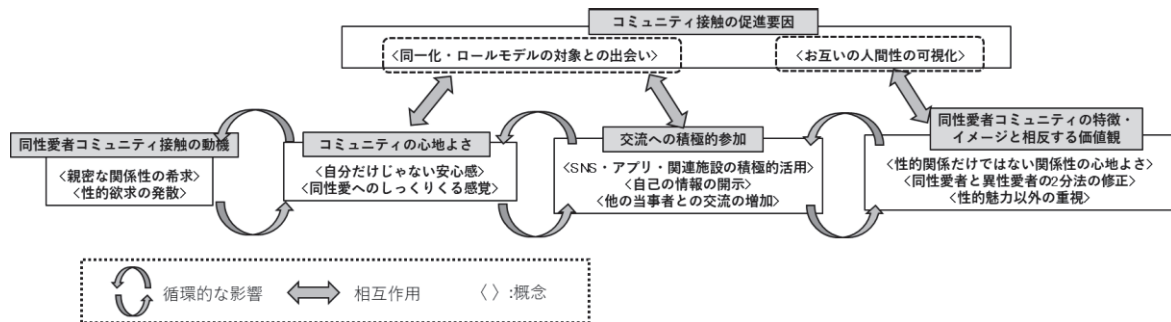


Figure 5. 男性同性愛者の他の当事者との関係構築のプロセス

の可視化>によって交流も増加し、〈性的魅力以外の重視〉や〈性的関係だけではない関係性の心地よさ〉、〈同性愛者と異性愛者の2分法の修正〉が生じていた。

**考察 同性愛者コミュニティの特徴・イメージの形成と影響** 他の当事者との出会いがネットの利用やゲイバー等に行くなどの能動的な行動に依存しやすいことが、当事者の関係構築の困難や同性愛者コミュニティの特徴に影響していたと考えられる。関係が継続しにくい要因として、関係構築の段階からより積極的な行動を要すること、他の当事者に求める関係性に齟齬が生じやすいことが推察される。さらに、ネットを介することもあり、中高生などの未成熟な時期に被害的体験をする危険性や、被害後に周囲に相談が困難であることも懸念される。 **関係構築のプロセス** 当事者は他の当事者との交流や性的体験によって、自らと同じ属性を持つ他者がいる安心感や、自らの欲求・感情と、同性愛との一致の実感から、同性愛者としてのアイデンティティ感覚を深めていたと考えられる。そしてロールモデルの存在への同一化や、他の当事者の性的指向以外の側面に触れることによって、より親密な関係が築かれていた。当事者は異性愛者とも比較しつつ、“同性愛者”という括りで捉えてきた視点から脱し、同性愛・異性愛という2分法での思考が修正されていったと推察される。

## 第 5 章 総合考察

### 第 1 節 本研究の成果

本研究の成果は以下の 3 点である。①カミングアウトは内的動機づけだけではなく、外的な要因に左右されやすいこと、②内在化された同性愛嫌悪による葛藤を、性的指向を否認・保留することで対処しつつ、他の当事者との関係構築によって内在化された同性愛嫌悪が低減されていたこと、③他の当事者との交流や性的体験から、同性愛者としてのアイデンティティ感覚を深め、男性同性愛者のコミュニティでは希求する関係の相違による困難が生じやすいことについて実証的な知見を得た。

男性同性愛者は当事者の葛藤が大きいほど、葛藤解決のために支援要請、他の当事者との交流の困難さが予想され、内在化された同性愛嫌悪への予防的介入や、他の当事者との安全な出合いを提供できる場の設置などの支援の重要性が示唆された。

### 第 2 節 本研究の限界と今後の課題

調査対象者の多くが青年期から成人初期であったことから、今後も社会的背景の変化や当事者の年齢を考慮した検討が必要である。また、研究 1 では同性愛者と両性愛者で葛藤に差異が見られ、性的指向の程度の差異も重要であると考えられる。

さらに、日高 (2000) では 65%が自殺念慮を経験しているのに対し、本研究の当事者からは自殺念慮の経験は語られなかった。宮腰 (2013) でも本研究と同様の結果が見られ、対面式の調査では精神的健康度が高い当事者が集まりやすいことが考えられるため、調査対象者の偏りについても考慮する必要がある。

## 引用文献

- Cass, V. C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4, 219-235.
- Cass, V. C. (1983-84). Homosexual identity: A concept in need of definition. *Journal of Homosexuality*, 9, 105-126.
- 電通ダイバーシティ・ラボ (2019). 電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT調査2018」を実施 電通ウェブサイト Retrieved from <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html> (2019年6月12日)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : W. W. Norton & Company.  
(エリクソン, E.H. 西平 直・中島由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Frost, D. M., & Meyer, I. H. (2009). Internalized homophobia and relationship quality among lesbians, gay men, and bisexuals. *Journal of Counseling Psychology*, 56, 97-109.
- Herek, G. M. (2004). Beyond 'homophobia': Thinking about sexual prejudice and stigma in the twenty-first century. *Sexuality Research & Social Policy: A Journal of National Sexuality Resource Center*, 1, 6-24.
- 日高 庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学, 18, 264-272.
- 石丸 径一郎 (2002). マイノリティ・グループ・アイデンティティ: 人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.

- 葛西 真記子 (2014). 児童期・思春期のセクシュアル・マイノリティを支えるスクールカウンセリング 張間 克己・平田 俊明 (編) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 同性愛, 性同一性障害を理解する (pp. 123-139) 岩崎学術出版社
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い—— 弘文堂
- Mayfield, W. (2001). The development of an internalized homonegativity inventory for gay men. *Journal of Homosexuality*, 41, 53-76.
- 宮腰 辰男 (2013). セクシュアルマイノリティを生きるということ——カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について—— カウンセリング研究所紀要, 36, 39-52.
- 岡本 祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味— ナカニシヤ出版
- Rosario, M., Hunter, J., Maguen, S., Gwadz, M., & Smith, R. (2001). The coming-out process and its adaptational and health-related associations among gay, lesbian, and bisexual youths: Stipulation and exploration of a model. *American Journal of Community Psychology*, 29, 133-160.
- 佐藤 郁哉(2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践—— 新曜社
- Shidlo, A. (1994). Internalized homophobia: Conceptual and empirical issues in measurement. In G. M. Herek (Ed.), *Lesbian and gay psychology: Theory, research and clinical applications*



(pp. 176-205). Thousand Oaks, CA : Sage Publishing.

Troiden, R. R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal and Biological Processes*, 42, 362-373.

Troiden, R. R. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17, 43-73.